○ヒメクロモジ (籾山泰一) Yasuitsi MOMIYAMA: *Lindera umbellata* var. *lancea*, var. nov.

日本の西南部に未記載かと思われるクロモジの一種がある。葉が狭くて，葉末がよく尖つているので，すぐにそれと認識されるが，葉柄が短く，葉裏や葉柄に一様にうすく絹毛を布き，それが晩くまで残つているのや，総花梗が短く，その上に黄褐色の短い毛があるのは，葉のよく尖ることと共に，多少，ミヤマクロモジ，*Lindera sericea* var. *tenuis* Momiyama を思わせるところもある。しかし，網脈が葉裏に隆起せず，葉も小形で狭く，質が厚手で，葉裏がより灰白を帯びているので，ミヤマクロモジよりはクロモジ *L. umbellata* Thunb. に近いという印象を受ける。小花梗もミヤマクロモジほど痩長ではない。まだ生きた花を検し得ないが，しばらく，クロモジの変種として記載する。和名はヒメクロモジとしたが，クロモジより特に小さいわけでもない。産地は，東大，科学博物館，京大その他の標本によると，駿河梅ガ島から遠江秋葉山，三河本宮山乳岩川，伊勢大杉谷，大和大台ガ原，三輪山，河内岩湧山，紀伊高野山，虎ガ峯，西牟婁郡東富田村十九淵，阿波海部郡炙喰村，那賀郡大龍寺山，大隅霧島山，日向白鳥山，鰐塚山，肥前雲仙岳などにわたり，その分布地域は，大体，日本西南部の外帯に属している。九州では西へ彼杵地方に向い，上記のように温泉岳に見出されるが，それは，ヤブイバラ *Rosa Luciae* var. *Onoei* Momiyama の分布 (豊後，肥後から筑後を経て肥前多良岳，温泉岳え) なども同様である。1951年の夏，わたくしは，三河新城の鳥居喜一氏をおたずねして，南設樂郡の本宮山に案内していただいたが，同山にはこのクロモジがたくさんあつて，鳥居氏もかねて注意されていた一種なのであつた。普通のクロモジと混生していて，お互によく区別がついた。北設樂郡の乳岩川でも採集したが，その時は，山本隆氏と同行した。最近，小川由一氏からは高野山の標本 (fl. ♀) をいただいた。わたくしがこのクロモジをはじめて見たのは遠州秋葉山で，もうふたむかしもまえのことであるが，大台ガ原では，ミヤマクロモジと一緒に生えていたようにも記憶する。おととしの秋には奥山氏と安倍川上流の梅ガ島で見出したが，これが一番，東の産地である。*Lindera sericea* var. *glabrata* Bl., Mus. Bot. Lugd.-Bat. **1**.: 324 (1851) は未知の変種に属するが，その記載は "foliis lanceolato-oblongis utrinque glabriusculis" とあつて，このクロモジらしい感じもする。なお，この稿を草する際，標本閲覧の便を与えられた京大の北村教授にあつく御礼を申上げる。

Lindera umbellata Thunb. var. **lancea** Momiyama, var. nov. A typo recedit petiolo breviore laminis angustioribus lanceolato-oblongis vel oblanceolatis utrinque magis acuminato-attenuatis subtus petiolisque pilis sericeis diutius remanentibus undique laxe vestitis non cito glabratis. Pedunculo breviore pube flava diutius persistente velutinopubescente. A *Lindera sericea* var. *tenui* foliis minoribus angustioribus crassioribus subtus magis glaucinis venis ulterius non

reticulato-elevatis. Nom. Jap. Hime-kuromoji (m.)

Hab. Japonia media et austro-occidentalis; Prov. Suruga Umegashima (TM); Prov. Tôtômi mt. Akiwa (T); Prov. Mikawa Minamishitaragôri mt. Hongûsan (in locis umbrosis sylvarun, K. Torii et Y. Momiyama, 19 Jun. 1951, fr.-typus in Herb. Fac. Sc. Univ. Tokyo et M), Chichiiwagawa (TM); Prov. Ise Ôsugidani (TK); Prov. Yamoto mt. Ôdaigahara (TK), mt. Miwayama (T); Prov. Kawachi mt. Iwawakiyama (K); Prov. Kii mt Kôyasan (T), mt. Toragamine (T. fl. ♂) Nishimurogôri Higashitondamura (T); Prov. Awadsi (T); Prov. Awa Kaifugôri Shishikuimura (T), Nagagôri Tairiujiyama (K): Prov. Ôsumi mt. Kirishima (MK); Prov. Hiuga mt. Shiratoriyama (K), Wanidsukayama (K); Prov. Hizen mt. Unzen (K).

(Signorum Explicatio: (T)=Herb. Fac. Sc. Univ. Tokyo; (M)=Herb Nat. Hist. Mus. Tokyo; (K)=Herb, Fac. Sc, Univ. Kyoto.).

○スズカケソウの自生地　(室　源一) Gen'ichi MURO; The native land of *Calorhabdos villosa* Makino.

岐阜県不破郡府中村中字屋敷 2213～2214 の1及び2番地に自生する。右は小竹義明氏の所有地に属する，マダケの藪で，2畝6歩ある。

昭和4年岐阜県武儀中学校に勤労当時，夏休みに郷里府中に帰り，附近に採集にでて見出し，スズカケソウとして標本を所持していた。後に岐阜立多治見工業学校の塩田健藏氏が見られ，確かに自生していたかと質問された後，非常に珍らしいものであることを漏されたので驚いた。昭和7年大垣工業学校の波磨実太郎氏が研究を重ねられ，此の植物が外国は勿論，日本に於ても上記以外に自生を見ない珍種とされ，保存しなければならぬことを力説されたが，何等策も講ぜられぬまま現在に及んでいる。

この竹藪の中にはヤブツバキ，アオキ，チヤ，ナンテン，ウコギ，フジ，サンショウ，ビナンカヅラ，キヅタ，シユロ，ムクノキ，テイカカヅラ，スイカヅラ，ノブドウ等の木本の他，草としてミヨウガ，ヌスビトハギ，フキ，イノコヅチ，ミツバ，ヤブラン，ミヅヒキ，ハグロソウ，ヨメナ，ウバユリ，ヤブガラシ，ドクダミ，ヤブコウジ，ミヤマカタバミ，アカネ，タチツボスミレ，チヂミザサ，セントウソウ，アオツヅラフジ，ハイドクソウ，イブキシダ，イノデ，ヤブソテツ等がはえている。スズカケソウはこれ等の雑草に混つてはえているのである，茎は組長く多くは枝分れせず，長いものは1米に及び，上部は蔓状を呈して雑草に藪いかかり，先端は地につき，そこから根を出して新植物を生じ，母株と連続したまま生育して無性的に盛に繁殖する。冬は地上部は枯死し，翌春根元に近い茎から新しい芽を出して生育する，花期は8月1日頃が最盛であり濃紫色の花をつける。以上の生態から附近広範囲に分布しているように推察されるが，